

家から小学校までは、子供の足で二十五分かかった。戸櫓じゅんこちゃんの家は、そのちょうど真ん中あたり。格子戸すれすれに狭い玄関があった。わたしと彼女の身長は大体同じで、教室は横長の机に二人並んで腰かける。一緒に帰るのも自然の成り行き、時々わたしは彼女の家に上がりこむ。二人とも一人っ子だ。畳敷きの部屋三つの家に、じゅんこちゃんはお母さんとおばあちゃんと三人で暮らしていた。教室ではおとなしいが、家では甘えっ子で大威張りしていた。家族はじゅんこちゃんを中心に回っている。二人でおやつを食べているとお母さんは必ず言う。

「山田さんはいいよね。第一（高女）に入れるもの。じゅんこは駄目だ、できないから」

「できないよ。こないだも、字がとっても綺麗って先生にほめられたよ、ね」

「また始まった」と平気な顔で彼女はおせんべいを足を投げ出してかじっている。五年生にとって、女学校は遠い国の話だった。

そのほか、お母さんが年じゅう話すのは、すばらしく出来のいい妹さんの自慢だ。そのじゅんこちゃんの叔母さんは隣に住んでいて、三歳と四歳の愛らしい娘がいた。この家にはしよつ中やってきて、わたしにもよく話しかけてくれる細おもての叔母さんだ。姉の自分は頭が悪くて女学校にも行けなかったけど、妹は第一高女の卒業まで一番だった。女専を卒業する時も代表で答辞を読んだ、との話をわたしも何回か聞かされた。じゅんこちゃんはたぶん何十回もだ。とにかく、二人が明るい仲の良い姉妹であるのは、見ていて気持ちがいい。

このお母さんが、かなり大きい机の前に座って黙って何かしているのに、時々わたしはぶつか。大きいハトロン紙の封筒に、黒い何かの入った袋と字の書いてある横長の和紙もていねいにたんで入れる。二十枚ぐらいかな。わたしはすぐそばで小母さん愛読の『銭形平次捕物控』に読みふけっているが、封筒に入った和紙に何が書いてあるか、いつも知りたく思う。横目で見ても崩し字でさっぱり読めない。やっと最後の戸櫓ふじという小母さんの名前がわかった。紙がこすれるさわさわがやみ、小母さんは封筒の束を重ねて、低い和ダンスの上に置く。

じゅんこちゃんは台所でおばあちゃんの手伝いをしていた。彼女はそういう仕事が好きらしい。わたしは全く好きではない。それでも学校帰りのおしゃべりは、楽しかった。

ある日、ふと思いついてじゅんこちゃんに聞いた。

「じゅんこちゃんのお父さん死んだの」

「ううん、生きてるよ」

「戦地に行ってるの」

「ちがうと思う」

どうもはつきりしない。仕方ないから聞くのはやめた。でも初めておしゃべりしたことから、啓子ちゃんが、自分の親のことをまっさきに話してくれたのを思い出した。

じゅんこちゃんの家の前を通り過ぎると勾当台通こうどうたいどおりに出る。通りに沿って我が家と逆の北に向かうと一人っ子仲間の角田啓子ちゃんの家がある。今思うと、あれは昔の武家屋敷だった。見上げるほど高く幅広い木の二枚扉が年中びたりと閉まっていた。色白で肥むとった啓子ちゃんは足の遅いわたしの仲間でもあった。席が離れていたせいか一緒に帰った記憶はないが、彼女に仲良しがいたおぼえもない。ただ何かのきっかけで彼女の家が近いことがわかって、遊びに行ったのだ。

大扉の脇のくぐり戸を入ると奥に大きい土蔵、左手に古い大きい家があり、すぐ啓子ちゃんとお母さんが出てきて、縁側に連れて行かれた。障子が閉まってて中は見えない。上がってとも言われないし、啓子ちゃんもどうして遊んでいいかわからないようだ。お母さんに言われて庭の池に行くと鯉を見たり築山を上ったりしたが、つまらない。その時、啓子ちゃんが話しはじめた。

「あたしのほんとお母さんは、病気で死んだのよ。今のお母さんは二度目のお母さんなの」

びっくりした。さつき会った時にもこにこして優しそうだった。でも啓子ちゃんはある日好き

そうでない。

「今度のお母さんは、宮城女学校の卒業生よ」

五年生のわたしは、どんな理由で彼女がそれを言ってるかもわからなかった。ただ親の話は、子供にとって学校とか勉強とかとは比べられないくらい大きい、話さずにいられないことだというのは何となくわかった。

「どこのおぼこだ」

男の声がして障子があいた。眼鏡の小父さん。お父さんだ。お母さんの声がして、障子はすぐ閉まった。へんなお父さんだ。おぼこって仙台の方言では赤んぼのことだろうに。わたし達は五年生だから赤んぼではない。娘の友達が初めてきたのに「どこのおぼこだ」なんて。わたしの父さんならどの友達が来たって、にっこりする。よく来たね、と言う時もある。可哀な啓子ちゃん、可哀な新しいお母さん。珍しく腹をたてながら、わたしは大きいお屋敷から帰ってきた。

いくらもたない頃、じゅんこちゃんが、勢いこんで話し出した。

「あたしのお母さんとお父さんはね。結婚したあと仲が悪くなつて、別々に暮らすことにしたんだって。そういうのリコンっていうのよ」

離婚はまだ珍しく、子供がめつたに聞くことのない言葉だった。たぶん、じゅんこちゃんは知っていた。山田さんに話してもいいよ、とお母さんが言ったのかもしれない。

同じ年の一九四一年十二月八日、太平洋戦争が始まった。長く続いてきた尋常小学校が国民学校と改められ、義務教育が六年プラス二年、つまり八年になり、教育内容、教科書すべてが戦時色に変わった。しかし時間が足りなかったせいとか、わたし達五年生、六年生は尋常小学校時代のままの教科書で勉強したのは幸せだった。記憶がいいかもされないが、卒業証書も尋常小学校卒業だったような気がする。それもあつてか、仙台市街中のわたし達まちなかの小学校は、従来通りの受験態勢にとびこんでいった。

六校時の授業が終わると、進学しない一割前後の生徒は帰される。教室の中の席の移動が始まる。県立第一高女の入試に合格できる成績をいつもとる少女十人余が最後列の机の前にかかる。住所のせいで第二、第三を狙う子は、ちらりほらり一つ前の列に座る。

県立高女合格を半ば保証された少女達は、概してのびのび、おっとりしていた。ほとんどが教育に関心ある中流階層の子供である。まして女の子は、前途に徴兵検査や戦闘が待っている心配がない。競争心とは大して縁がなかった。この優等生組の前列の私立希望者の中にじゅんこちゃん、啓子ちゃん、蒼白く下ばかり向いている佐藤きみちゃんが入っていた。じゅんこちゃんときみちゃん、いつの間にか仲良くなった。

わたし達の三つ前に日中は座る、きみちゃんの薄黄色の少し汚れたセーターの肘にいつでも穴があいているのを、わたしは不思議に思っていた。ほかに着替えがないから、との想像力は全く働かなかった。国語の時間、前から一人ずつ立って、教科書を五行ぐらいずつ進んでいく授業がある。きみちゃんの番、立って彼女が消え入りそうに読み始める。「聞こえないぞ」と先生が言う。いつとき声を出すが続かない。小さい声ががたがた震える。読めない子はいるがどの行も震えるのは、きみちゃんだけ。くすくす笑うものがある。わたしもたぶん笑った。

人に話しかけることのない、座ったきみちゃんの机のところじゅんこちゃんを出かけて行く。ノートになにか面白い絵を描いてもらって、きみちゃんが珍しく笑っていることもある。わたしは優等生組の誰かとおしゃべりして、きみちゃんに関心はなかったけれど、前列に彼女を見て、そうかと思った。じゅんこちゃんの頭が悪くないのは知っていたが、きみちゃんも悪くないのだ。かまわれないだけなのだ。

優等生組の中に正子ちゃんという市立病院長の娘で、可愛くダンスのうまい子がいた。教師も周りも特別扱いしていたが、こだわらない気のいい少女だった。そして優等生組の中にも一人だけ嫌われっ子がいた。おさげを二つに肩に揺らし、小顔ではきはきしている。勉強もまあできた。でもずるいとか嫌いだとか、陰で言われる。わたしもじゅんこちゃんも、好きではない。子供にしては気がまわる。正子ちゃんのを、家来みたいについて歩く。先生が喜ぶことを、うまく思いつく。大人なのだ。身なりがきたなく勉強のできない貧しい階層の子を馬鹿にして、いじわるを言う。

ある日の放課後、前に並んでいるじゅんこちゃんがこっそり言った。

「サダはしせいじで、お母さんは、おめかけさんなんだってさ」

サダは定枝ちゃん、悪口をいう時のあだ名。彼女はまた新しい言葉を言った。

「なに、しせいじって」

「お父さんのいない人だよ」

「じゅんこちゃんも、お父さんいないじゃん」

「あたしのお父さんとお母さんは、ちゃんと結婚式したよ。サダとはちがうの」

「おめかけって？」

「悪い人のことだよ」

じゅんこちゃんは、定枝ちゃんが第一に入るのが、すごく嫌なのかもな。わたしは彼女の十倍ぐらい言葉を知ってるつもりでできたけど、ほんとの物知りは、じゅんこちゃんかという気がしてきた。家に帰ると、さっそく母に「しせいじ」の意味を尋ねた。母は暗い顔になった。

「それは人を傷つけるとっても悪い言葉なの。ぜったい使っていけないの」

なぜ悪いかを、わたしは知りたいんだ。「おめかけ」の意味は、聞く気がなくなった。

昭和十八年（一九四三）の三学期が始まった。甘いものは回りからほとんど消えてしまった。三月は卒業である。学校に行くと、定枝ちゃんの名字が、いきなり三浦に変わっていた。わけがわか

らなくて、優等生全員がきよとんとなった。じゅんこちゃん一人が平然として、教えてくれた。叔母さんが第一だったからね。

「第一はおめかけの子供は落とすのよ」

それでもわたしはわからなかった。

重なるように、今まで見たことのないきみちゃんの母が先生に会いに来た。地味な着物で、きつい顔の小母さんだった。

きみちゃんが第一高女を受けることになった！ これにも優等生達は啞然あぜんとなった。国語教科書の五行か六行さえ震えて読めなくなる人が、受かるとはとも思えない。わたしもそう思った。仲良くしていた、飛び抜けて算数のできる春子さんが、先生から聞いたことを教えてくれた。

「きみさんを育てているおじいさんが厳しい人で、県立以外の女学校にはやらないと言ってるんですって。ひどいよね」

同感だった。落ちるに決まってる。私立ならどこでも入れる人であった。そこにわたしの問題まで出てきた。担任の先生は大変だったと思う。

出願の日が迫った時、わたしの父はあっさり言った。

「愛子は尚綱しやうこうだよ。母さんも伯母ちゃんも尚綱を卒業した。伯母ちゃんは今も先生してる」  
おまけに父は尚綱の理事長をしていた。

「なんでも。仲良し一人もいないのに」

わたしは怒って泣いた。翌日は担任の男性教師がきた。その頃、市内の私立女学校ランクの一番上が白百合（仙台）女学校、次は宮城女学校だったか。啓子ちゃんはきつと入れる。次が尚綱と常盤木とぎわき。でも常盤木は、わたし達の学区からかなり離れている。担任がくり返したのは、第一高女に心配なく入れるのに何をわざわざ、の一点張り。だが父も母も動かない。ちがう土俵にいるから、議論がかみ合わない。先生はめげずにまた足を運んでくれたが、駄目だった。気の毒であった。

尚綱の建学の精神は「Be a good girl（良き人間たれ）」、県立女学校の精神は「勤勉なれ、良妻賢母であれ」のあたりだったかも。ただし、いずれ建学の精神もとうに消えて「戦争に協力し国のために働け」のスローガン一色に染めかえられていた。国家の力は強大であった。

そのうちにどういう風の吹き回しだったか、じゅんこちゃんが尚綱を受けることになった。私立の中では尚綱が一番近かったからか、そのわけは今もわからない。とにかく、わたしの不機嫌はたちどころに消えた。学校のランク、授業のレベルより、十二歳の少女にとって何より何より大切なものは友達であったから。

定枝ちゃんは、めでたく第一に合格した。きみちゃんは周りの推測どおり一人だけ第一を落ち、義務教育に従って高等科に入った。大人も子供もひもじく、街通りからも家の中でも灯りは消える寸前であった。

豊かな家の子、貧しい家の子、勉強のできる子、できない子、わいわい入りまじり、楽しく過ごしたわたしの黄金時代はその春終わった。じゅんこちゃんやきみちゃんにとっても、かけがえなく平和な時間ではなかったかと思う。

## 2

一九四三年四月、尚綱女学校のチャペルの入学式にわたしと母は出かけた。広瀬川のほとりである。宮城遥拝みやぎはらばい、君が代斉唱、校長式辞、教室に入って担任と同級生との顔合わせのあと、肩を落とした母と、じゅんこちゃんと組がちがって不機嫌の戻ったわたしは、ろくに話もせず歩いて帰った。

讚美歌も聖書の数行も開会、閉会の祈りもない入学式があるなど、考えたこともない母親であった。毎日戦勝を祈願するよう隣組から配られた伊勢神宮のお札を、黙ってタンスの上に置き放す。防空演習参加の呼びかけにも出ない。戦争は人殺しと思っている。それでも地域で不愉快な目にあわなかったのは、三十年住みついて、周りに好かれていたせいだったのだろう。しかしあの入学式は尚綱とはちがう。それまで泣いたり怒ったりすることのなかった愛子をどうにか黙らせて入学させたけれど、あそこは尚綱ではない。

一方わたしは親達の懊悩あうのうを全く知らなかった。讚美歌も隣人愛の教えもない小学校に慣れていた

し、一番のショックは、一ヵ月たたぬうちにじゅんこちゃんが学校にこなくなつたことの方だった。学校をやめたいのは自分なのに、先を越された思いがある。不登校に市民権はない。きみちゃんだって、ほんとは尚綱に入りたかつたのに入れなかつたのだ。

訪ねて行つたじゅんこちゃんの家は空き家。隣も叔母さん達はいなかつた。空き家の住所に手紙を出してみた。思いがけなく返事がきた。彼女がこんな手紙を書ける人だつたと、初めて知つた。あなたはわたしのたつた一人の友達だつた。学校をやめたことは、いくら考えてもくやしいと。相変わらずわけがわからない。何も言つてくれないんだ。言つてもわからないと思つてるんだろう。住所も書いてなかつた。

それでも子供だから友達はずつできていく。それにつれて彼女は遠くなつた。第一に入つた数学に強い春子さんが二回遊びにきた。尚綱とはレベルが段ちがいだ。ぶつくさ言うと言つた親達は心からつらい顔になる。弁当をもたせてくれるのだから、文句ばかり言うのは、やはりわがままなんだろう。二年生の冬の終わり。三年生になったら工場行きである。どこの女学校にいても同じ。

学校帰り、市電の車庫前にきた時、「山田さん」と呼ばれた。顔をあげると、あの明るい細おもてのじゅんこちゃんの叔母さんだつた。なつかしい。三年ぶりか。グレイとえび茶の縦縞の上着ともんぺ、叔母さんもなつかしそうでにこにこしている。少しやつれたかな。いや父も母もずいぶん

痩せてきた。普通のことだ。通りの左側で立ち話になつた。今は上杉山通かみすぎやまどおりの借家に引越してきて、彼女は元氣そうだつた。わたしは母の縫つてくれた肩かけ鞆に教科書や筆箱をつめこんで、輪ゴムで二つに分けた髪をくくつていた。

一言も教えてくれなかつたが、小学校卒業直前じゅんこちゃんのお母さんは彼女を連れて再婚したのだ。茶畑ちやばたけの家だそうだから、尚綱からも小学校からかなり離れている。どんな家だつたか叔母さんは言わなかつたが、わがままで箱入り娘のじゅんこちゃんは新しい環境になじめなかつた。

お母さんはもとは菓屋の長女で婿取りだつたが、夫は出て行つた。戸樫家には代々伝わってきた秘伝ちゆうでんの中風薬があつた。半身不随に効くとの評判があり、店は閉じてでも注文は絶えなかつた。母娘の暮らしがゆつたりしていたわけが、ようやくわかつた。黒い袋と真っ白の和紙。じゅんこちゃんに夢中だつたお母さん。なんで再婚したのか。茶畑と広瀬の尚綱は市の東と西のはずれ。彼女は自転車は持つてない。市電も大混雑だ。

学校帰りがどんどんおそくなる、母はいても立つてもいられない。自分を責める。どんな人だつたか知る由もないが、母ふじさんがじゅんこちゃんから離れることができなくて、母娘が二人して茶畑を出てきた成り行きはわかる気がした。一部屋借りる金は妹さんから借りた。こういう仲の良いい姉妹もいるのだ。

通学の途中か夜遊びの時にできた、仙台商業出身の男友達とじゅんこちゃんのつきあいは続い

ていた。そして去年の暮れ、一九四四年、十四歳の彼女は母親になった。

娘のすべてを受けられるふじさんは、今度は子育てのすべてを喜んで引きうけている。

「おぶって歩いてると、あたしの子かって人に思われるの」って嬉しがつてるんですから、と妹さんは苦笑いした。青年の親はさいわい良い人達で二人の結婚を認め、今四人は愛子の借家あやしで暮らしている。食糧難だから、畑を作っている。じゅんこちゃんは「未婚の母」ではない。

「愛子さん、あなたはたくさん勉強してね」

そう言って叔母さんは別れて行った。

じゅんこちゃんはいつかからか、わたしのことを話してもわからない人と思っていたのだ。今度こそわかった。どこかで会っても、わたしは何を話していいかわからない。灯火管制で薄暗い通りをふらふらと歩く。今度こそ追い抜かれた、という気がした。

### 3

あつという間に二十五年が過ぎた。

仙台で一人暮らしの伯母がころんで大腿骨骨折、大学病院に運ばれ手術をした。四歳の息子を連れて病院の大廊下を歩いていた時、向こうから歩いてきた看護婦さんが目を細くしてわたしをじつ

と見た。

「山田さんですね」

眼鏡の下の蒼白い肌に薄くソバカスが散っている。紛れもない。

「佐藤きみちゃんっ」

声をあげると、彼女は抱きついてきた。一度も話したことなかったけど、おぼえてくれたんだ。だんまりで、膝ばかり見ていた彼女が。会ったのが別の同級生だったら、素知らぬ顔ですれ違っただ行ったかもしれぬ。彼女はじゅんこちゃんと仲良しで、わたしはじゅんこちゃんの友達だったから、なつかしくて声をかけてくれたんだろう。急いで五階だったかの伯母の病室番号を教える。夕方仕事が終わったら、きてくれるそうさ。白衣が怖い息子は、わたしの背中にしがみついて顔を隠していた。

伯母は手術後、だいぶ落ち着いていた。ありがたいことに隣のベッドが空いてるから、息子と泊まっていと言われた。七時すぎ、花を持って白衣のまま、きみさんが入ってきて、ていねいに伯母に挨拶した。まだ独身で、母の妹の叔母さんと市営住宅に住んでいるということだった。急いでいて、二ヵ月後のお盆休みに、山形に泊まりに行くと言ってくれた。そして二十五年もたつ戦災でなくなったわたしのお悔やみまで言い、そそくさと出て行った。つらい出来事に遭ったわたしを、子ども時代よりずっと近しく思ってくれているのかも、と思った。

八月末、約束通り、彼女は二人の子どもにおもちゃとお菓子、夫にはスコッチウイスキーのミニボトル三本をおみやげにできてくれた。グリーンの薄くすてきなスーツを着ていた。髪もちゃんとセットしていた。子供と夫が寝静まったあと、彼女は「おしん」さながらの母の一生と自分の生い立ちを話してくれた。つらい暗い物語だった。同時に彼女と仲良しだった箱入り娘じゅんこちゃんのにデリケートなやさしさに目を開かれる思いもした。人が大切なことに気づくまでには、どんなに長い時間がかかることか。それでも、ほとんど何も知らずに死んでいく。

きみさんの祖父は、在郷軍人<sup>ざいけいぐんじん</sup>で、大酒飲みのやかましい人だった。在郷軍人とは戦争時には軍人として呼び出され、平時にはそれぞれの仕事についているらしいが、給料をもらっていたかどうかはわからない。彼には六人の子供がいて、家は貧しかった。子供達は義務教育以上の学校には行けず、皆働きに出た。長女であったきみさんの母も、小学校を終えると、東京の大きな屋敷に奉公に出た。上流の礼儀作法や言葉遣いをきびしく仕込まれたのは、本当だと思う。きみさんにもその残り香を思わせるようなところが、ちよつとある。そして正直な働き者の女性であったことも、辿った人生からも想像がつく。彼女が身ごもったのが何歳であったかは知らない。相手はお屋敷の主人か息子が兄弟のどれかだ。

一九三〇年は、世界的大恐慌のさなかである。日本国内で一番ひどい打撃を受けたのは、東北の農村だったという。家族が生きのびるために女郎屋に売られ、奉公先で主人達の性暴力に遭い、過酷な工場で重い結核で死んだ数知れぬ娘達が山形や岩手県から出たという。きみさんの母は農家の娘でなかったが、同じ運命であった。

「今後当家への出入り、金銭の要求、内部事情の口外の一切を禁ずる。禁止事項に永久に違反せぬことを誓約する」との書面写し、赤ん坊と一定額の養育費と引きかえに母は屋敷を追われ、仙台の実家に帰った。大金のおかげで父は娘を責めず、孫を邪険に扱うことがなかったというのは本当だろう。祖母も叔母もやさしかった、ときみさんは言った。しかしすぐ仙台の資産家の家に住みこみ女中として働き始めた母に、彼女がまつわり甘えることは知らずにきてしまった。「だからきみちゃん、いつも淋しそうだったんだ」。自分はすぐ傍にいたのに、と思いつながらわたしは聞いていた。

4

あれから今までわたし達は友達だ。たくさん話を聞き、たくさん衝突したが、彼女の人間性への理解は深まった。母が娘のために必死で働いていたことに疑いはない。クラスの誰も持っていない花飾りで縁どられた冬の帽子を買ってもらったこと、働いているお屋敷にたまに連れて行かれると奥様も大奥様もやさしくて、おいしいお菓子をご馳走になった嬉しい思い出を、彼女はよく語る。



しかし日に日に敗け戦<sup>いくさ</sup>が続き、傾く国力の影響を真つ先に受けるのは貧しい人々である。母の弟、若い叔父もふびんな姪にやさしかった。彼は結婚して親から別居し、男の子が三人いた。召集された彼は、たぶん中国戦線で戦死した。残された妻に再婚の話がきた。若い女は三人の幼児を夫の実家に預けると嫁に行ってしまった。一方、母の住みこむ資産家の家に戦争の影響がないというのもあり得ぬことだった。もともと安い母の賃金は、減っても増えることはない。

卒業式が終わり、四月、彼女が高等科に通い出した時、じゅんこちゃんから手紙がきた。

「どこに離れても、あたし達ずっと友達でいようね」と書いてあった。彼女はとうとう返事を出さなかった。そのあと道で、じゅんこちゃんとはばったり会った。その時も彼女は気づかぬふりをして通りすぎた。

昔、叔母さんから聞いたじゅんこちゃんの話をお話を話すと、彼女はその思い出を語ったのだ。少女の友情を踏みにじったんだとわたしは思った。

とにかく高等科を卒<sup>お</sup>えると、きみさんは看護婦学校の受験勉強をたった一人で始めた。母は十数年働いた屋敷をやめさせられた。なんとしても資格がある。彼女はやはり頭がいい。合格と同時に寄宿舎に入った。そして今は大病院の看護婦さんだ。頑張ったのだ。

母が健在だったある日、二人は喧嘩をして、きみさんは思わず叫んだ。

「あたしのお父さん、誰なのよーっ」

そのあと、母はメモ書きをよこした。

「死ぬ前に必ず話すから、もう少し待っておくれ」

でも、自分の死期は誰もわからない。まもなく母の末期乳癌がわかった。入院費、介護費を出す力は、まだ若い彼女にはなかった。死後献体の約束をすれば職員の家族は入院費が免除される決まりがあったという。母に付き添う余裕はない。まして自分達を捨てた男のことを聞く時間などは。

「母はわたしのすべてだったのにね」

ぼつりと彼女は言った。誰にとっても、母親ってそういうものかもしれない。

## 5

今、彼女は有料老人ホームの六畳間に住む。友達もなく、身内もなく、わたしもなかなか訪ねてあげられない。遠く幼かった一人一人の日々。